

---

# 黒き宝石

煌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き宝石

### 【Zコード】

Z3464F

### 【作者名】

煌

### 【あらすじ】

少しアブナイ内容でござります。連載の様に思われますが連載ではありません。きっと気付く方もいると思われる内容です。攻め側のほぼ一人称で語りです。テレテレと幸せな語りですが、許せる方はどうぞお読み下さい。

(前書き)

これらの文は、B-L要素がありますので駄目だという方、免疫のない方はご遠慮下さいませ。o\_r\_n

その光を失うくらいなら、  
俺は平和など望まなかつた

『黒き宝石』

「よー、元気でやつてつか

友人であり恋人であり上司である男を、俺は訪ねた。

するとその男はすやすやと寝息を立てて執務室の机に突っ伏してい  
た。

……んな顔して寝るなよ……

襲われるだろ、とボヤきながら近くにあつたコイツの上着をかけ  
る。

それが撲つたかったのか、小さく

「ん……」

とづめいた。

可愛い……

いや待て待て待て自分。

つてかさつきも  
今自分、

かなり

カミングアウトしたよな？

……したよな！？

かなり自然に思つてた……ってかそれが余りにも普通過ぎたから今まで気付かなかつたわ。

ま、確かにキレーな顔してんだわコレが。

(ああ、これを思つてるのが俺だけない事を祈る)

ま、恋人つて言つたから一人は公認つてことは理解して聴いてくれよ？

え？なに聞きたくないつて？  
だつたら耳塞いでの。

初めての出会いはもう忘れてしまつたけど、かなり心臓に悪い出会いだつた。

真っ正面から下を見ながら歩いてくるYシャツ姿のヤツに、俺もまた気付かず、衝突。  
俺より頭一つ低い位置（=首のあたり）にそいつは額をぶつけ、その場に蹲つた。

ワリイ！と謝りつつ屈むと、漆黒の髪が蛍光灯の光で反射して眩しかった。

真っ白で痩せた体に、少し痛みに潤んだ真っ黒な瞳。

あ、

何か言おうとした俺に、すまなかつた、と言いつて行ってしまつた。

いや、別にコレで何かがあつたわけじゃないぜ？

俺はそんなに乙女じゃない。

ともかく、コレが出会い。

その後、同じ職場になつてかなりの苦難を共にしてきた。その度にお互いの仲が深まり、親友と呼べる程になつた。今、すんなりと話したけど、この数行にかなりの時間と精神をかけた事を推測してくれ。

まあともかく俺はカミングアウトすることになるんだが、その話は置いておいた。ヤツが起きた。

「…………何してる」

ああ、そんな寝惚け眼で睨んだって怖くもなんともないし、寧ろ可憐……

「変なことを考えてないか？」

「…………よくお察しで。」

「や、別に？ ただお前みたいな上官が机に突つ伏してゐなんて、滅

多に見れないと思つて。」

「……いつも見てるだろ?」

「ん?」

「朝とか。」

「……まだ寝惚けてんのか?」

いつもならそんな爆弾発言(つまりはカミングアウトの事実。)なんかは口にしようとしただけです。『い殺氣出すくせに。』

(この前は確か電話が飛んできた。その前は万年筆が俺の後ろの壁に刺さった)

俺が心の中で葛藤していると、また机に突っ伏してしまつ。

「眠いんだ、用があるなら後にしてくれ

そういつて俺の恋人はまた机に伏せた。

「寝ちまつたのか?」

問い合わせれば、伏せた頭から うーだの、んーだの唸る声がする。

「つたぐ…」

ずり落ちてしまった軍服をまたかけてやる。

そんな仕草から、俺はコイツが俺に語った野望を思い出した。

それは珍しく何もなかつた夜に、一人で酒を飲んでいた時の話。あんまし酒に強くないコイツは飲んで一時間もしないうちに潰れて、

そのまま一時間起きなかつた。

しうがなく俺が酒瓶の片付けをしていると何やら物音がする。  
見れば起きたらしく、ぼおっとして周りを見回し、俺をジイツと見  
た。

そして、痛む頭を左手で押さえながら、

「俺は」

…驚いたのなんのって。

誰よりも偉くなるつてのは簡単じゃないし、かなり難しいのも理解  
している。

だからこそ、だつたのか。

俺は恋人であり、親友であり、上司であるコマイツを、

支えよつと思つたのは。

「おやすみ…」

俺はそいつにしていつものように漆黒の髪に口付け、部屋を後にしてた。

それから何年か後、

俺はそれが別れになるなんて知らなかつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3464f/>

---

黒き宝石

2010年10月28日04時15分発行